

ファウチ氏が最後の会見 接種拒む人みると「心苦しい」

2022. 11. 22 日本経済新聞



退任前最後の会見で話すファウチ氏（11月、ホワイトハウス）=ロイター

【ワシントン=赤木俊介】米政府で感染症対策を長年担ってきたアンソニー・ファウチ大統領首席医療顧問は22日、ホワイトハウスで退任前最後の記者会見に臨んだ。トランプ前大統領やバイデン大統領のもとで新型コロナウイルス対策を指揮してきたファウチ氏は帰省が増えるホリデーシーズンに向け、オミクロン型対応の改良ワクチンの接種を米国民に呼び掛けた。

ファウチ氏は大統領首席医療顧問や国立アレルギー感染症研究所長などの職から退く。会見でファウチ氏は50年以上の職務について「新型コロナへの対応に限らず、やれることは常に全力でやってきた」と振り返った。「私は医療従事者として、党派や思想、主義主張を問わずすべての患者が健康に退院するよう努力してきた」と述べるとともに、「政治的な理由でワクチン接種を拒む人を見るととても心苦しい」との心境を吐露した。

米政府による新型コロナへの初期対応に関しては「状況は常に流動的だった。国民に状況は刻々と変わっていると伝わるよう心掛けていた」としつつ、「当時は3年間にわたり苦しみと死が続くとは思っていなかった」と想定外の展開だったことを明らかにした。「今後数年で1年あたりの感染者数は減るとみているが、そこまで到達するにはワクチン接種やマスク着用を含む対応策を続けることが欠かせない」と継続した対策の重要性を訴えた。

ファウチ氏は誤情報の発信による医療従事者の信頼低下についても触れた。「ホワイトハウスの会見で誤情報を発信していた人もいたが、私は隣で訂正を続けた。重要なのは科学的な根拠に基づいた情報発信を続けることだ」と強調した。「ジャーナリストやメディア関係者も責任ある報道を行うよう心掛けてほしい」とも語った。

会見を通しファウチ氏はオミクロン型対応ワクチンの接種を米国民に呼び掛けた。「冬季は感染のリスクが特に高く、家族と集まるホリデーシーズン前に接種を終えてほしい」と訴え、ワクチン以外にもマスク着用や検査などといった対策をとることを推奨した。また、例年より早く感染が広がっているインフルエンザに対しても対応したワクチン接種が有効であると説明した。